



平和資料館 草の家 だより

No.170

2026年3月20日発行

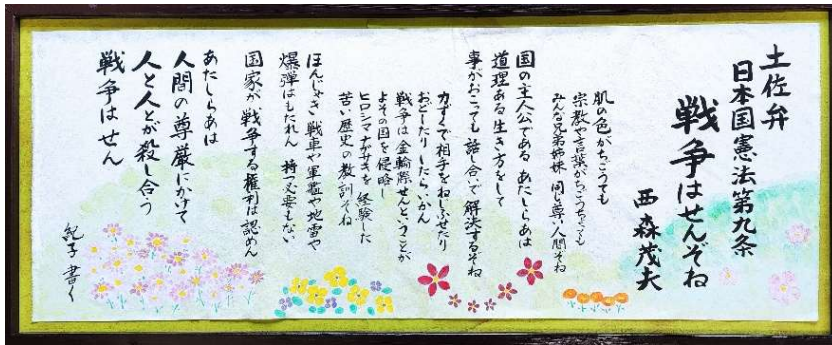


草と草の根の連帯をあらわす
草の家のシンボルマーク

〒780-0861 高知市升形 9-11 Tel 088-875-1275 Fax 088-821-0586
E-mail grh911@dream.jp HP <http://www.maroon.dti.ne.jp/kusanoie/>

第二次高市内閣の発足、改憲・戦争準備反対の大波を !!

「平和資料館・草の家」館長 出原 恵三
総選挙の結果、第二次高市内閣が発足しました。自民党単独で衆議院の3分の2議席を超えるかつてない巨大与党を背景とした戦後最も危険な戦争国家づくり内閣です。昨年7月の参議院選後には20%台にまで低落していた支持率が石破首相と交代した途端、まるで魔法にでもかかったかのように



70%の高支持率となり「日本列島を強く豊かに」「日本を守り抜く」など積極発言を続け、挙げ句「存立危機事態」発言にまで及びました。高支持率を奇貨として唐突にも解散、選挙に打って出て「国論を二分する政策を問う」と選挙を内閣の信任投票でもあるかのように宣伝し「高市旋風」を吹かせました。

自民党圧勝の要因は、小選挙制による弊害や膨大な宣伝費などにもありますが、基層には国民の「心身の疲弊」が横たわっているように思えてなりません。生活の困窮化や将来への展望が持てない、特に若者層が、初の女性首相であることの「新鮮さ」や「積極性」、「勇ましさ」などにある種の魅力を感じ「今度こそは、何とかしてくれるのではないか」との期待・願望が、政策の中身とは関係なく衝動的に投票に向かったところにあると思います。リベラルな政策や主張は後景に追いやられ「高市人気」という雰囲気さらわれていったのです。ファシズムを予感させ不気味です。選挙投票前に県外にいる友人から「いよいよ昭和15年(1940)の感がしてきました」というメールが届きました。アジア太平洋戦争開戦前夜の世相に近づいているというリベラルな視線からの警鐘です。

選挙後の施政方針演説で高市首相は「日本は総合的な国力を徹底的に強くしていく」「長期戦の備えの必要性、安保3文書前倒し達成」「憲法改正に関し早期の発議」「スパイ防止法」など戦争国家づくりの骨格が見えるような発言を連発し、国民の暮らしに寄り添う発言はほとんどありません。国会において正面から対決できる勢力は僅少となりました。

2月28日はアメリカとイスラエルがイランに先制攻撃を開始しました。国連憲章や国際法を幾重にも蹂躪する行為であり、世界中から批判と抗議の声があがっていますが、日本政府は黙認、追従し高市首相はなんとイランを非難する有様です。事態の推移によっては自衛隊の中東派遣が行われるかもしれません。

日本は今、戦後最大の平和の危機に直面していますが、戦争への道を絶対に許してはなりません。今が1940年と違うのは戦争に反対し平和憲法を守ろうという市民が多数健在であるということです。今の危険な状況を一人でも多くの人に伝え戦争準備反対、憲法守れの大波を草の根からつくっていくことが求められています。

(写真は「平和資料館・草の家」に掲げる『土佐弁 日本国憲法第九条』)

「大久野島毒ガス工場跡の保存を !! 」

出原 恵三（草の家・館長）

大久野島は瀬戸内海国立公園のほぼ真ん中に浮かぶ周囲4kmほどの小さな島です。国民休暇村の「うさぎの島」として有名ですが、戦前・戦中においては毒ガス工場が建てられ地図から消えていた島としても知られています。戦争の加害を最も象徴する戦争遺跡として位置づけることができます。戦争遺跡保存全国ネットワーク主催の見学会とミニシンポが現地で開催されました。

大久野島は日露戦争前に芸予要塞の一角を構成していましたが、その後島民を立ち退かせ1929年から毒ガス製造を開始し1944年7月まで続けました。周知のように第一次世界大戦（1914～1918年）では毒ガス戦が行われ甚大な被害をもたらされたことから、その後、毒ガスの戦場での使用は国際法で禁止されました。しかし日本軍は日中戦争以降、中国の戦場で2,000回以上に及ぶ毒ガス戦を行い多くの兵士や市民を殺傷しました。敗戦後、大量の毒ガス兵器を現地に遺棄してきたことからその被害は現在も続いています。毒ガス工場の最盛期には動員学徒1,000人以上を含む6,600人もの人々が劣悪な環境下で製造に従事させられ多くの犠牲者が出ており、戦後も後遺症で苦しみながら亡くなっていった方が少なくありません。東京裁判ではアメリカとの取引によって毒ガス戦の実相は戦後長きにわたって隠蔽され、日本政府も国民休暇村というレジャー施設を作ることで忘れさせようとしてきました。

島には毒ガス障害者や地域の人たちの努力によって毒ガス資料館が建てられており、毒ガス製造器具、毒ガス兵器、毒ガス被害、戦場での毒ガス使用命令書などの資料が展示されています。毒ガス工場の多くは休暇村建設に伴い撤去され公園となっていますが、随所に当時の建物や関連遺構が戦争遺跡となって残っています。島の西側の長浦にある巨大なコンクリート貯蔵庫（写真上）は象徴的な存在です。高さ11m、直径5.4m、100tの鋼鉄製貯蔵タンクが6基置かれイペリットガス、ルイサイトガスを貯蔵していました。

東側のフェリー桟橋の近くには、毒ガス工場の動力源として建設された鉄筋コンクリート3階の巨大な発電所建物（写真下）が建っています。毒ガス製造禁止以降はここで風船爆弾が作られ、満球テストも行われたところです。周囲は高い土塁で囲まれており、その入口の擁壁には「MAG2」と標記された文字を認めることができます。朝鮮戦争時、ここが弾薬置場として利用されていたことの証です。

このように大久野島の戦争遺跡は、毒ガス製造期を中心に日露戦争、朝鮮戦争と三つ戦争の痕跡が重なり戦争の変遷を示しています。

現存するコンクリート構造物は劣化が進行し、早急に強度診断等を行い保存策を講じなければ崩壊します。中でも象徴的な存在である長浦貯蔵庫と発電所建物は緊急を要します。両者ともに蔦が巻き付き鉄筋

が露出していますが、辛うじて原形を保っています。しかし崩壊は時間の問題です。このまま放置すれば負の遺産のまま終わってしまいますが、保存整備すれば戦争の凄惨さ愚かさを発信する人類史的な遺産に昇華させることが可能です。原爆ドームと同様の役割を果たすことができます。特に加害の記憶を端的に示す戦争遺跡として重要な歴史的価値を持っています。早急に保存策を講じる必要があります。



巨大な長浦貯蔵庫跡



発電所建物

戦争の語り部のバトンを受け取って

四万十市 矢野川 研（草の家・会員）

四万十市の中学校教員を5年前に退職しました。その1年後、母親運動連絡会を通じて、四万十市のT小学校から平和教育授業の依頼を受けました。6年生の若い学級担任が修学旅行後のまとめをどうしたらよいか困った末の依頼でした。これをきっかけに四万十市内3校で延べ8回、平和教育の授業を行ってきました。

基本的には6年生が修学旅行するにあたり、その事前事後の授業を担当しました。6年生担任が児童たちに学ばせたいことを踏まえ、旅行先で学ぶべきことと訪問先での視点、ヒロシマ・ナガサキが他人事とならないために、地元四万十市の戦争を伝えるようにしています。

授業づくりで最も重視しているのは四万十市の戦争です。その調査と聞き取りには時間を要しますが、そこは無職の強み、時間はたっぷりありますので地域へ足を運び、戦争体験者を訪ねて話を聞き、野山を歩き回って防空壕などの戦争遺跡を探します。

体験談では、「男子が召集されて家から送り出す際、太平洋戦争開戦当初は万歳で送ったものの、戦況が悪化してからは夜中にひっそりと送り出していた」事や、B29による空爆やグラマンからの機銃攻撃を受けた少年少女（私の母の体験）のリアルな体験を聞き取り記録することができました。

八東（やつか）地区の250キロ爆弾の着弾地点の確認や安並地区に爆弾池がまだ残っていることも新たな発見でした。八東地区の着弾地点は農地であり、中村市街地の着弾地点は居住地であることから戦後間

もなく埋められましたが、安並地区の農地着弾地点は、農地の所有者が空爆により亡くなったことから爆弾池は埋められることなく現在も残っていることが分かりました。その爆弾池は現在湿地で草が生い茂り近づくことができないため、四万十市教育委員会に調査するよう進言しましたがその後どうなったことか。（写真左2枚）

授業した校区では八東地区で3か所、竹島地区と大用（おおゆう）地区でそれぞれ1か所防空壕跡を確認しています。グラマンの機銃攻撃から逃げ回った少年は現在寝たきりとなり、空襲から学校を守ろうとして九死に一生を得た私の母は昨年亡くなってしまいました。昭和の戦争体験者から私たちにすでにバトンは渡されています。（写真上）

今、この手にあるバトンを次の世代に渡す時期はすでに訪れています。

爆弾池

場所は国道439号線後川橋から北へ2.0km進み、東へ入ったところにあります。安並地区出身の元同僚（63歳）からその存在を聞き、調べたものです。地上から私が撮影した下の写真では、中央付近の草地の中に窪地があることがうっすらと確認できます。



防空壕

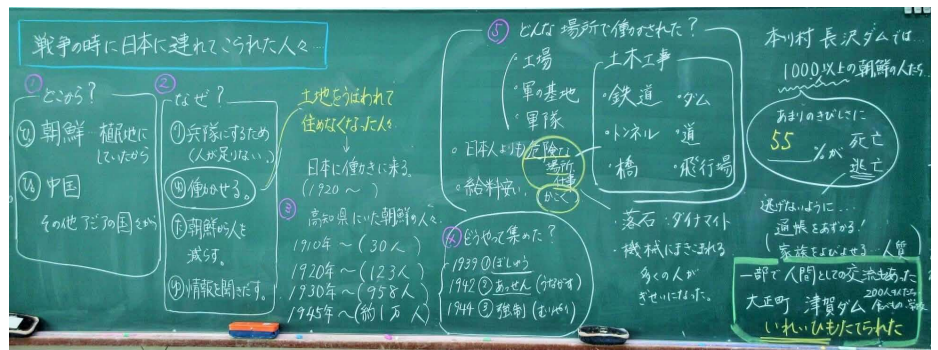
入口の高さは1メートルほど。かなり崩れかけています。場所は旧竹島小学校跡地（通称ふる学校）の裏手になります。現在40歳前後の地元の子どものころ野山で遊んでいたのがこの防空壕の存在を知っていますが、現在の小学生たちはほとんど知らないようです。



子どもたちと学ぶ近代史 — 歴史を学ぶ意味 —

宮川 真幸 (草の家・理事)

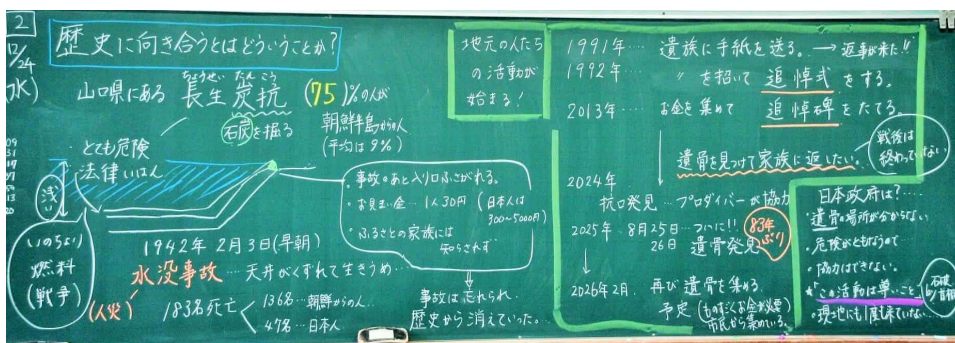
小学校の6年生の社会科の授業を紹介します。日中戦争の拡大にともない国内の労働力不足を補うために朝鮮から日本に連れて来られた人々について学びました。「どこから?」「なぜ?」「どんな場所で働かされていたの?」「どうやって集めたの?」と問い、それぞれが予想を立てながら展開していきます。徐々に植民地支配の実相が浮かび上がります。



そして、高知ではどうだったのか?ということも合わせて学び(草の家ブックレット「高知の戦争遺跡」が役立ちます)自分たちの住む高知での強制連行の事実を伝えると子どもたちは衝撃を受けていました。

次の授業では、今年の夏 83 年ぶりに遺骨が発見された長生炭鉱を教材にして、83 年前に何が起こったのか、事故の原因と当時のこと、その後の今日へと続く市民の活動、そして極めて消極的な日本政府の姿勢を伝え、歴史に向き合うとはどういうことかを考えました。児童の感想を紹介します。

- ◎ 日本政府は、昔も今も自分がしたことが分かっていないような気がしました。なぜ被害者がそこまで協力しているのに、加害者が協力しないのだろうかと思いました。
- ◎ 本当はこれは国がやらないといけないことなのに、地元の人にやらせるのは人としてどうかと思いました。ちょっとでも役に立てたらとか思わないのかと思いました。
- ◎ 日本政府がかつて進めたことなのに現地にも行かず協力もせず何もせず、犠牲になった人々を救おうとしないのはさすがにどうかと思います。亡くなった人々の家族や親せきに失礼なんじゃないかと思ます。これからも宣伝や救いの声をあげ続けて日本政府には助けてほしいです。
- ◎ 国はなぜ動き始めていないのか。この事故を起こした責任は絶対国だと思。悲しむのは遺族です。市民がやっているところがすごいけど国はなぜ前向きでないのか?歴史を知るということはやられたことだけでなく自分たちが起こしたことに真剣に前向きに向き合っていくことだと思います。自分はこの活動に大賛成です。
- ◎ 私は歴史に向き合うとは未来を変えていくことだと思います。日本政府は未来をどう変えていくのか考えていないのではないかと思います。遺骨の調査に大きな時間をかけているからこそこの市民活動は尊



いことだと思います。

- ◎ 昔のことをきちんと反省して、生かす。そこまでが歴史に向き合うことだと思います。なので、水没事故については日本が一番協力すべきだと思います。日本が一番だめなことをしているから一番反省すべきです。

- ◎ 歴史というのは出来事があり終わるものではなく、出来事が終わってからが本当の歴史であると思いました。国も事情があるだろうけど、お金だけでなく犠牲者に手を合わせてほしいです。
- ◎ この水没事故で死んだ人々は戦争の影響でなくなったのだから十分戦没者であると思います。僕は歴史に向き合うとは、人の心と向き合い、これまでしたことと向き合うことだと思います。この国の人たちはなぜ協力してくれないのか、本当のことを知りたいです。

子どもたちのまっすぐな思いが伝わってきます。過去の過ちに対する誠実な対応を抜きにして未来への友好な関係など築けません。過去と現在、そして未来はつながっており、子どもたちは過去の歴史を知ることによって現在の社会をより深く見つめ始めます。近代史を丁寧に学ぶことで子どもたちが過去の歴史を教訓として、人権を大切にしたい平和な未来を選び取ることに繋がると感じています。

高知県の「米騒動」



堀川の船上から見た今の大鋸屋橋。
右手が菜園場通り、左手が九反田方面

馴田 正満（草の家・研究員）

「令和の米騒動」が始まってから2年経つが相変わらず米価の高値が続いています。ここで思い出すのが今から108年前の1918(大正7)年に起きた米騒動です。7月23日、富山県魚津町の漁民の主婦たちが県外移出米の積み込み拒否に端を発し集団で米商人・町村役場に対して米価引き下げ・困窮者救済を要求しました。これを新聞が「越中女房一揆」と報道したことにより、米の廉価販売を求める運動が全国に広がりました。米価高騰の直接の原因はシベリア出兵を目前にした米商人・地主らの投機によるものでした。

全国の運動については井上清・渡部徹編『米騒動の研究』全5巻があり、都道府県ごとの詳細な状況が新聞記事や警察資料等を基に記録されています。それによると高知市では8月9、10日夜、電柱等に「貧民救済首謀者大塩平八郎」の名で、米価に苦しむ者は8月15日夜高知公園に集合すべしという貼り紙が張られました。当日午後8時頃には高知公園三の丸に250余の群衆が集まり大川筋の高知市長宅へ押し寄せ、代表は外米を15銭、白米を25銭で販売するよう懇願しました。この頃になると群衆は数百人となり、本町に出て豪商で高知市米価調査会長の川崎幾三郎邸、市内の米穀店に押し寄せ、翌16日午前2時頃解散しました。

高知市の東に隣接する土佐郡下知町でも「恐らく高知市内の群衆の一部が押しよせたのであろう、16日午前2時30分頃、米穀商山川梅太郎方がおそわれ、軒燈が破壊された」と記録されています。このとき群衆の中にいた一少年が体験を書き残しています。貴重な証言なので紹介します。(出典は升井義則著『ある金属労働者の手記』1976年、第6版)

(前略) 米騒動に参加した人数は、一千万ともいわれ、大衆要求の行動は、まさに正義の社会心理が地域、地方共闘で日本全土を網の目につらぬいた。高知市農人町の鉄工所に住みこみの徒弟として働いていた少年時代の私は、白いめしを腹いっぱい食べたいという要求から、この全国の情勢を身体で理解していた。鉄工所の隣の町は菜園場町といって堀川に沿って大阪商船などの倉庫が立ち並び、そのなかの一軒は「山川」という四国一ともいわれた米穀商であった。店先に等身大のエビス像が据えられ、前の堀川には十石船の舳が十数隻もつないであった。舳には米俵が山と積まれ、店の隣に立ちならぶ倉庫に運び込む荷役作業が行われていた。

8月15日の夜、8時すぎであった。店の近くの「たかはし」という橋(注)のたもとに500名ほどの労働者が集まってきた。沖仲士・車夫等の身なりをしたその日の生活をしている当時のプロレタリアートたちであった。そして「米を出せ」「火をつけろ」と叫んでいるのが聞こえた。倉庫と倉庫の間を走る人影が見えて、緊張した雰囲気はただようなかで、店や倉庫の電灯に石が飛び、灯りは消えた。車引らしい股引姿の大きな身体の労働者が、胸をはずませてそこに立っていた少年の私に、「兵隊がくるか、みてきいや」といった。この日は、高知市と伊野町の中ほどにある朝倉村から歩兵第44連隊の1個中隊がきて警備にあたっていた。私が電車道の方に走っていくと、白い手袋で指揮刀を胸に当てた青年将校を先頭にして4列縦隊(約350名)が、ザア、ザアと靴音をたててゆるやかな駆足で進んでくるのが見えた。私はすぐに群衆のところへ駆けもどって、この様子を報告した。

軍隊は銃に剣をつけ、帽子のあごひもをかけて戦闘態勢をとっていた。人々は隊を乱さず軍隊が近づけば散り、去ればまた集まる、その動作は敏捷で一分の隙もなく、真剣そのものであった。その間、どれほどの時間であったのか。弾圧と闘争のその情景は、牛肉と皮を交ぜあわせたような軍隊の匂いとともに、五十余年後の今日も、私の臉に焼きついている。

翌日、町は昨夜の話でもちきりであった。工場でも、労働者、隣のブリキ屋、大阪商船の技師などみんな「山川の米倉庫から米を出させるのはあたり前だ」と労働者の闘争を支持していた。(後略)

※注 菜園場通り南の堀川に架かった大鋸屋(おがや)橋のこと。往来する船の障害にならぬように橋脚を高くしてあったため「たかはし」「たかばし」とも呼ばれた。

草の家・新年会

「世界がひとつになるまで」のうたのように 平和への願いと協力の大切さ胸に

藤原 尋子（常任理事）

お天気のよい2月1日（日）の朝から、「草の家」の玄関前では、元気のよい餅つきのかげ声が響きました。蒸し上げた餅米のかたまりを老若男女が交代しながら「よいしょ！ よいしょ！」と、杵を振り下ろし、石臼の中で真っ白な餅ができあがっていきます。

昨今はめったにできない餅つき体験、少し小ぶりの杵を持って「重(おもっ)!!!」と言いながらも、だんだんと使いこなす子どもたちは、あん餅つくりでも大活躍してくれました。できたてほやほやのイチゴ大福や大根おろし餅のおいしさは、忘れられないものになったと思います。

午後の部は1時から始まりました。岡村正弘名誉館長の「草の家の"草"の意味は…」とのあいさつの後、大人・子ども合わせて40人以上が乾杯！テーブルの上のご馳走（ほぼ西森遼子さんの手作り）と名誉館長仕込みの「おでん」に舌鼓。一気におしゃべりの花が咲きました。

狭い舞台の上でバイオリンの合奏をしてくれたのは内村・大塚ファミリーの5人。昨年が続いての“親子三代楽団”の登場です。孫の中学1年生と小学3年生のコンビが舞台下で歌ってくれたのが、すてきでした。

「崖の上のポニョ」「カントリーロード」「世界がひとつになるまで」のあと、「ふるさと」と「手のひらを太陽に」の2曲は、歌詞カードも配られていたのでみんなで合唱。これら5曲とおまけの「アンパンマンのマーチ」まで歌いきった二人には「お疲れさま!!!」と言いたいです。

参加者の自己紹介の中で、竹崎浩寿さん（昨年のお新年会に初めて参加して、草の家の会員さんに）は水道管で作った尺八の特技を披露。他の人も「私と『草の家』について」や、「いま一番考えること」などをこもごも語る中で、初参加の大学生や就職したばかりの若い人たちの感想が、新鮮でした。

岡林副館長が「いろいろな人が集まって盛大で楽しい会となりました。こんな集まりを持てるのも平和

あってこそ。今年も力を合わせて草の家の運動をもり立てていきましょう」とのあいさつで締めて2時半閉会となりました。



草の家・主な活動日誌 (2025年12月以降)

- 11/29(土) 郷土の軍事化に反対する高知県民ネットワーク・はりまや橋四銀前宣伝 (25人・出原館長)
- 12/04(木) 「出前授業・語り部チーム」スタッフ会議 (草の家7名)
- 12/06(土) 大久野島見学と交流 (「戦争遺跡保存全国ネット」主催22名・出原館長)
- 12/07(日) 第31回12・8平和のつどい (こうち男女共同参画センター・ソーレ84名)
- 12/10(水) 草の家だより (No169) 発行
- 12/13(土) 朝倉忠霊塔調査 (12名)
- 12/25(木) 第2回理事会 (草の家20名) その後の望年会ではモンゴル留学生2名が踊りの披露 (写真下)
- 12/27(土) 草の家・大掃除 (10名)
- 12/28(日) 草の家・年末年始休館 (~1/3迄)
- 01/16(金) 朝倉忠霊塔調査
- 01/23(金) 追手前高校・総合的研究「人生の先達からの聞き書き」
(岡村名誉館長・出原館長、写真右下)
- 01/29(木) 第7回常任理事会 (草の家)
- 01/31(土) 富士国際旅行社「高知・四万十川にふれる旅」ツアー
(草の家11名・岡村副館長)
- 02/01(日) 新年会 (餅つきと文化行事子ども含め約50名の参加)
- 02/06(金) 朝倉忠霊塔調査
- 02/07(土) 平和のための博物館市民ネットワーク2025年度全国交流会
(京都・出原館長~8日迄)
- 02/09(月) 「2026年ピースピースウェイブ in こうち」第1回実行委員会 (草の家13名)
- 02/09(月) 「第48回戦争と平和を考える資料展」実行委員会 (草の家7名)
- 02/11(水) 「くらしの共同研究所」(京都) から取材に来館 (草の家・出原館長)
- 02/13(金) 朝倉忠霊塔調査
- 02/26(木) 第8回常任理事会 (草の家)



※ <訂正> 「草の家だより」(168号2025.09.25付)の『撫順の奇蹟を受け継ぐ会』関西支部第9次訪中団~撫順・瀋陽・北票・阜新・旅順・大連~に参加して(6~7ページ)における「工労」という表記は誤りです。正しくは「労工(ろうこう)」です。

「平和資料館・草の家」2026年度総会のご案内

とき：2026年4月26日(日) 14:00~

ところ：平和資料館・草の家

総会議事に先立ち、近藤^{やすのり}恭典弁護士(高知法律事務所)による「高市政権がねらう憲法改正とスパイ防止法」講演、総会終了後には懇親会を計画中です。